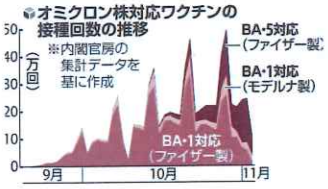
オミクロン株対応ワクチン、接種率５・９％止まり…副反応に抵抗感・危機感も薄れ

1/5(土) 12:01 配信 468

読売新聞 オンライン

1 / 2



（写真：読売新聞）

新型コロナウイルスの変異株オミクロン株に対応したワクチンの接種率が４日時点で全人口の５・９％にとどまっている。第８波に備えるため、政府は２回目までの接種を終えた１２歳以上の人を対象に、年内に希望者全員への接種完了を目指すが、低調な出足となっている。若い世代を中心に副反応への抵抗感や、危機感の薄れなどが背景にあるとみられる。

【図表】知っておきたい…オミクロン株の特徴

接種は９月２０日以降、第６波で流行した系統「ＢＡ・１」対応のワクチンを使って始まり、１０月１３日からは現在主流の系統「ＢＡ・５」対応ワクチンも登場した。

内閣官房の集計では、全国で１日あたり２０万～５０万人が接種を受け、１１月４日までの累計では約７３７万人。政府は１日１００万回を超えるペースの接種体制を整えているが、これを大きく下回っている。最新型のＢＡ・５対応ワクチンの投入で接種が加速すると期待していたが、傾向の大きな変化は見られていない。

奈良由美子・放送大教授（リスクコミュニケーション論）は「副反応への抵抗感や効果に疑問を持つ人が接種をためらうことが背景にある」と分析。広瀬弘忠・東京女子大名誉教授（災害・リスク心理学）は「行動制限の緩和でコロナへの警戒感が薄れ、接種控えにつながっている」と指摘する。

接種率は年代別で差がある。加藤厚生労働相は４日の閣議後記者会見で、「（現時点では）４０、５０代が接種の中心になっている」と述べた。高齢者は７、８月頃をピークに従来型で４回目接種を受けており、３か月以上の接種間隔を考慮すると今後、接種が可能になる人も多い。厚労省幹部は「高齢者の接種はこれから伸びる。現役世代にどれだけ接種してもらえるかがカギだ」と語る。

記事に関する報告

この記事はいかがでしたか？
リアクションで支援しよう

89 学びがある
259 わかりやすい
174 新しい視点